

メキシコ先住民トラウイトルテペック村の教育運動

—歴史的展開と危機に直面する現在—

米村明夫

◎はじめに

筆者は、本誌においてメキシコの先住民ミヘ(Mixe)の教育運動として、トラウイトルテペック(Tlahuitoltepec)村のアユック・コミュニティ高校(Bachillerato Integral Comunitario Ayuujk Polivalente: BICAP)を紹介したことがある(米村[2003])。この運動は、先住民運動の成功例といえることができるが、しかし現在同村の運動は危機に陥りつつある。本稿は、その始まりから現在までを歴史的な流れの中に位置づけ、理解しようとするものである。

先住民の運動を可能としてきた歴史的条件として、第1にメキシコ革命の理念の持続(時々の活性化)がある。1910年に始まるメキシコ革命は、貧者や先住民を重要な柱とする正義の社会という理想を掲げた。それは、政府内ではインディヘニスモ(メスティーソの側から先住民の言語・文化や福祉を尊重、改善しようとする思想・施策)を生み出す条件となり、インディヘニスモは、特に先住民の若者をバイリンガル教育の教員として養成することを通じて、先住民主義(indianismo)―先住民自身による自らの価値観・言語・文化の再生産・発展を求め、それに基づく社会経済政治的条件の改善を求める思想や運動―の担い手を用意した(Leyva Solano[2005])。先住民主義の運動は、インディヘニスモをメスティーソ社会への統合政

策として強く批判することとなるが、この批判によってインディヘニスモの政策は、先住民運動の要求に応える一定の変容を伴いながら展開していく。1970年代の後半には先住民運動は、「バイリンガル・バイカルチュラル教育」を基本理念とするバイリンガルシステムを、正式の公教育の一部として制度化させることに成功する。また、1994年に武装蜂起したチアパス州の先住民を中心としたサパティスタの運動は、自らにメキシコ革命の農民運動指導者サパタの名を冠したことに示されるように、メキシコ革命の理想を再び呼び起こそうとするものであり、建前としてはそれに応えることを使命としてきた政府に対して、全国の先住民運動は飛躍的に有利な条件を得ることとなった。

先住民の運動を可能とし、また特徴づけた歴史的条件的第2は、近代国家形成の特質に関わるものである。ヨーロッパの近代国家は、集権的で直接的に国民を把握する行政的能力を持つ国家として成立したが、メキシコを含むラテンアメリカでは、地理的歴史的条件下から安定的な集権的国家の形成、国家による行政の末端までの浸透は困難であった。このため20世紀に入ると、さまざまな主要社会団体・勢力を、半ば自律性を認めたまま国家の政治的な支持基盤および行政的装置に組み込み、これによって政治的、行政的な弱さを補うという形で近代国家の形成が進められてきた。そ

これは、コーポラティズム—政府に取り込まれた団体リーダーを通じた、政府によるメンバーの支配—と呼ばれる新しい政治体制の形成と同時に、その中で以前からのパターナリズムあるいはパーソナリズムが持続していく、ラテンアメリカに特徴的な社会・政治関係をもたらした。先住民共同体地域も基本的にこうした体制に組み込まれてきていたが、その組み込まれ方は緩やかなものであり、リーダーシップのあり方次第でその自律性が高まる余地を持つものであった。先住民運動はそこに展開されたのであり、その極はサパティスタの運動とその要求の自治要求への収斂にみられる。

トラウイトルテベック村（以下トラウイ村）の運動も例外ではなく、基本的にその成功は、教育を受けた若い世代を中心とする先住民主義的なリーダーシップが、伝統的な共同体自治組織である役職（cargo）システムとの協同体制の形成を通じて村の自律性を高めたことを条件とする。そしてまた今日の村の運動の危機は、近年他村でもみられる役職システム弱体化傾向の結果である。

以下、こうした視点からトラウイ村での教育運動の発展過程を述べ、最後に簡単に総括を行なう⁽¹⁾。

1 先住民主義的リーダーの登場と自動車道貫通拒否

オアハカ州は、メキシコで最も先住民を多く擁する州である。その行政の末端である村（municipio）⁽²⁾は、先住民地域では、先住民共同体（村の下のレベルにある集落）を基礎として構成されている。先住民の村は、コーポラティズム国家体制への編入を目指すPRIの浸透、支配に対し（Díaz Montes[1992]）、自律性を保持すべく抵抗してきた。トラウイ村を典型として、ミッヘ民

族地域（2000年センサスによれば人口9万8831人）でもそうした自律的な村が少なくない。ただし以下で述べるように、こうした自律性も近年危うくなりつつある。

ミッヘ地域には、1966年にミトラ（州都オアハカ市から自動車で1時間ほどに位置する）からアユートラ村（2000年の人口5504人）への自動車道が開通している。アユートラ村は、地域への入り口にあり、事実上地域の中心として最も開発が進んでいる。1970年代には道路が延長され、そこからさらに50分ほどで、トラウイ村（人口8406人）に着くことができるようになった。ただし、主要道は村の南東をかすめていくので、村を訪ねるには、トラウイ村を終点とするバス（現在であれば、または乗合タクシー）に乗ることが必要である。これらの村は、標高が2500メートルほどにあり、地域の高地帯に属する⁽³⁾。

1962年に村に入ってカトリックの布教を始めたサレジオ教会は、60年代の終わりごろ、将来の村の司祭、教育者に育てるため、村から有為の青年たちを選び奨学生として、プエブラ、メキシコ・シティなどの教会の師範学校、セミナーオなどに送っている（Delgado Jiménez et al[2001: 76]; 黒田[2002]）。彼らの中には、フローリベルト（Floriberto Díaz Gómez）、マウロ（Mauro Delgado Jiménez）、ドナート（Donato Vargas Pacheco）、アンドレス（Andrés）などがいた⁽⁴⁾。村から出た若者たちは、当時の社会状況、イデオロギーや運動に対し敏感であった。教会の与えた教育機会は、時代の背景の下で、この地域と村の先住民運動の指導者を育てることとなった⁽⁵⁾。

フローリベルトは、その中でも卓越した指導者である。彼は、当初の神学奨学金を教育奨学金へ変更、さらに1974年に国立人類学歴史学大学（Escuela Nacional de Antropología e Historia、

ENAH)修士課程へ入っている。ENAHは、バタッジャ (Bonilla Batalla) などの批判的人類学、先住民主義の拠点であり、フローリベルトはその影響をもろに受けた。後に述べるように、この頃すでに先住民主義的影響をトラウイ村に対して与え始めている。1970年代末、村へ戻り、村を超えたミへの民族運動を志向する。ドナート、マウロもまた、フローリベルトと協力する。

1970年代は、全国的な動きと軌を一にして、ミヘ地域全体で政府のインディヘニスモ政策が急速に拡大する一方で、先住民を主体とする運動が始まり、この地域の社会的、政治的な動きが活発化した時期であった。1971年に、この地域を対象とする国立先住民庁 (Instituto Nacional Indigenista: INI) の地域調整センターがアユートラ村に設置された。トラウイ村には、1974年に、19人の文化プロモーターがいた (黒田[2002: 237-238])。また、70年代の後半にはバイリンガル小学校の普及が始まり、1980年代には、ほぼすべての集落に小学校が設置された。

政府のインディヘニスモの路線が展開する中で、この村がとるに至った先住民主義的な方向を理解する上で重要な最初の事件は、1974年の自動車道が村の中心部を通ることの拒否の決定である。トラウイ村の場合、延長してきた主要道は、村の南東を通過していくこととなり、主要道から村の中心までには、20分ほどの坂道を歩かなければならないこととなった。どのようにして、村の人々はこうした選択を行なったのであろうか。筆者の行なったインタビューを総合し、当時の状況と合わせると次のように解することができる。一般的にいえば、発展を望む村にとって、道路建設、道路へのアクセスは極めて重要な要求項目の一つであったから (Nahmad Sittón[2003])、トラウイ村においても、そうした考えは強く存在した⁽⁶⁾。

しかし、家の立ち退きという実際的な理由からの反対意見が存在し、さらにその反対意見を正当化するフローリベルトなどの意見—自分達の文化や生活のあり方を先住民主義的な立場から擁護する—も出された。こうした対立を含む議論の中で、通常の村々の場合とは異なり、貫通拒否の決定がなされた⁽⁷⁾。また、代替案としての接続道の建設についても合意がなされている (Kuroda[1993])。この選択は村の将来にとって決定的に重要な意味を持つこととなった。すなわち、一方でそれは、容易に動かすことのできない不利な客観的条件—他の村と比べて商業発展や公的施設獲得の困難性につながる—をもたらしした。他方、それは村が主体性を確立していく—重要問題について政府の開発政策にただ従うのではなく、異なった方向を自ら選択する—ための経験となった。そしてこの主体性のさらなる強化という方向で、先住民主義的なリーダーシップが展開されることとなる。

2 農村師範実験学校と音楽訓練センターの誘致

トラウイ村は1975年の第1回全国先住民会議に、全国農民同盟 (Confederación Nacional Campesina: CNC) によって招待されている (Delgado Jiménez et al[2001: 76])。同村の代表たちは、その機会を利用して、当時新しいタイプの師範学校として設置されつつあった、実験師範校の村への設置を請願する。実験師範学校は、農村地域に置くことによって不足勝ちの農村の教員を養成し、かつ農村に根付く教員を育てるための新しい政策であった⁽⁸⁾。村はこうした請願、設置の過程に、「社会文化改良委員会」を通じて積極的に参加した (Delgado Jiménez et al[2001: 77])。1966年に始まるこの委員会は、村出身の小学

校教師達によって構成されていた（Yinet[1998: 10]）。実験師範学校の設置（1976年）は、それが1986年に農業技術高校に置き換えられるまでの10年ほどの間に、村出身の教師を急速に多く生み出すことになった。その卒業生アナスタシオ（Anastacio Cardoso）によれば、学校ではマルクス主義者である教師たちが、人民に奉仕するということを教えていたという⁽⁹⁾。卒業生はすべて他の村で教職に就くが、数年後に多くの者が村の小学校の教師として戻ってきた。アナスタシオもその一人である。フローリベルトなどに加え、実験師範学校卒の彼らによって、村の若い「知識層」のイニシアチブが強まり、先住民主義的な方向での村としての団結がより容易になっていったであろう。

1976年、先住民の文化振興プログラムとして、ミッヘ地区に音楽訓練センターを設置する可能性がもたらされた（Instituto Nacional Indigenista, Centro Coordinador Indigenista, Ayutla, Oax. [1982]）。トラウイ村では、マウロが中心となって、活発な文化活動を活発に行っていたが、村の吹奏楽隊はその中でも重要な位置を占めていた⁽¹⁰⁾。彼らはセンターの村への誘致を強く望んだ。1977年に、設置場所を決定するための会議が開催されている。アユートラ村、タマスラパン村、トラウイ村の3候補地についての秘密投票が行われ、アユートラ村とトラウイ村が同数を占めた。続く決戦投票でトラウイ村が選ばれることとなった⁽¹¹⁾。多くの村にとってのアクセスの良さだけをいえば、アユートラ村が選ばれていたであろう。しかし、トラウイ村の熱意に加え、アユートラ村にばかり多くの公的施設を置くことに反対するバランス感覚が重要な要素として働いたと思われる。1979年に、音楽訓練開発センターが創設された。実験師範学校や音楽訓練開発センターの施設獲

得の成功において、村の主體的な運動が功を奏したのは、その前提に、政府の先住民政策があった。村がそうした政策の対象として選ばれたのは、運の良さによるところも少なくないと思われる。しかし、その成功は、先住民主義的なリーダーシップが強化される条件をもたらし、村がそうした方向を明確にしていくことに貢献していく。

村の活路を教育や文化に見出そうとする先住民主義的なリーダーシップが、伝統的な村組織を通じて発揮され、その自律性をさらに高めるものとなったのである。

3 村の連合を目指す先住民運動の試み

1970年代の末に村に戻ったフローリベルトは、そうした村での活動を基礎としながら、さらに村を超えた地域の連合を目指すこととなった。彼らの運動は、既存の政治秩序（地元のPRIやCNCの勢力）からの自立性を明確化するものであり、それらの勢力との軋轢が始まる⁽¹²⁾。また、自治を主張し政府の農業・土地政策に反対することによって、政府との対立も露わになっていく（Nahmad Sittón[2003: 414]）。教育の分野では、運動が先住民主義的な教育を求め、そのコントロールを目指すようになるが、その要求達成は一定の前進と限界をみせる。

フローリベルトは、1979年に自然資源防衛委員会（Comité Pro-Defensa de los Recursos Naturales）を結成し、村を超えたミヘ民族全体の団結を目指す運動を始めている。この組織は紆余曲折を経ながら、1988年にできる法人組織「ミヘ人民へのサービス」（Servicios del Pueblo Mixe, SER）へとつながっていく。SERは、ミヘの人々やミヘ地域の各村の役職者に対するコンサルティング的組織として活動を継続しながら、リーダー

の下で運動の方向を自覚的に追求する運動の拠点として機能することとなった。彼らはオアハカ市に事務所を構えた。それはオアハカ市に住むミへのプロフェッショニスタ（高等教育を受けた人）達による支援・協力を容易とした⁽¹³⁾(Nahmad Sittón[2003])。この頃には、トラウイ村からオアハカ大学に入学する者が出始めていた。これらの高等教育を受けた者は、運動の新しい世代を構成する（黒田[2002]；Nahmad Sittón[2003: 386-389,392-393,415, 418;Delgado Jiménez et al [2001: 97]）。

教育に関しては、教育内容そのものを彼らの目指すものに変えていこうとする試みが始められる。1980年、CODREMIによって「ミへ基礎教育実施」プロジェクト（Instrumentación de la Educación Básica Mixe）が作成されている（Nahmad Sittón[2003: 514,522]）。それは、政府のバイリンガル・バイカルチュラル教育政策の理念と現実の乖離を批判し（Nahmad Sittón[2003: 501]）、教育の先住民による自治を基調とした、先住民主義的教育のあり方を説く基本文書である⁽¹⁴⁾。その結果、公教育省先住民教育局とCODREMIの共同という形で、同名のプロジェクトが4人の人員配置によって始まり、翌年以降、地域の地図の作製、民話、伝統的知識の採取や、ミへ語表記の統一化の研究が行なわれることとなった（Nahmad Sittón[2003: 503-504,522,560-572]）。

4 コミュニティ中学の設立と村の教育プロジェクトの形成

トラウイ村の教育運動は、CODREMIの活動と密接に関連しており、先住民主義的イデオロギーに基づきながら、広い視野と実行力を備えるものとなった。1979年に、マウロ達が中心となっ

て村立のコミュニティ中学校の設立が進められた。彼らは、ミへ高地にある唯一の連邦立中学が、メスティーソへの統合を目指すインディヘニスモ政策の尖兵、すなわち文化プロモーターの養成所となっていると批判し、自らの中学の目的を、ミへの生活を価値視し、活発化させることとしている（Nahmad Sittón[2003: 529]）。生徒達も校舎建設に加わって作られたこの学校は、中学校として公教育省の認定は受けるものの、財政的支持は受けられなかった。教師陣はマウロや小学校の教師などボランティアによるものであり、そこには外国人ボランティアの参加もあった。しかし、5年後の1984年に財政難から、連邦立の中学校（普通の教育内容の中学校）へと転換されていく。

コミュニティ中学の試みは、彼らの先住民主義的立場（教育内容と運営の彼らによるコントロール）を、公教育の本体たる正規の学校のあり方として持ち込んだ点で、これまで得てきた成果とは異なった重要性を持つ。この意味で、それが連邦立中学校に後退したことは、国家による財政面を含めた支持が得られなければ、そうした立場に基づく実践は持続不可能であることを示していた。そこで運動は、包括性を持った教育プロジェクトを作成し、政府にその財政的支持を含めた承認を求めるといったパターンを繰り返すこととなった。

1984年、村の教師とプロフェッショニスタ達は、「ミッへ民族の包括的教育のためのアイデア」を作成している⁽¹⁵⁾（Delgado Jiménez et al[2001]）。そこでは初等前教育から後期中等教育までコミュニティのための一貫した教育の必要性が説かれ、後期中等教育機関の創設が提案されている。この新しく設置される教育機関は、コミュニティの必要に対応するために、「教育内容の決定に関する十分な自治」、「コミュニティによる教員人事の決定権」、「教員にはコミュニティ出身者が優

先されるべきである」ことなどが述べられている (Delgado Jiménez et al.[2001:93,96])。この年、小学校の先生になるための必要な学歴が高等教育4年と変更されたことに伴い、2年後には、村の実験師範学校は廃止となる予定であった。村は、この「アイデア」を提案理由として、農牧技術高校 (CBTA) の設置、運営を農牧技術教育局長ラセ (Roland de Lassé) と INI の長であったリモン (Miguel Limón Rojas) に対して請願している。ラセ等は、それを支持し、教育省によって (Yinet [1998:10] ; Delgado Jiménez et al.[2001:82]) 請願が認められる⁽¹⁶⁾。

村に設置された農牧技術高校では、初めに教員に対し「コミュニティの教育アイデア」を理解し、自分のものとするための研修がなされた。しかし、その2年後に、勤務条件をめぐって教員の間に対立が生じ、公式に認められた労働時間と権利の遵守を主張する教師達は去り、プロジェクトに賛成しフルタイムで勤務 (放課後も村のために奉仕) する者だけが学校に対し「約束」の署名をして残ることとなった。しかし、この学校は、基本的に行政、カリキュラムなど、教育内容の点で、通常の農牧技術高校と変わらないものであり、結局、村は新たなプロジェクトを構想する。

1990年、オアハカ市に住むプロフェッショナル達によって「トラウイ村のためのオルタナティブ教育」が提案される (Yinet[1998:10])。村の教育運動に高等教育を受けた青年達が参加し、リーダーシップが彼らに移り始める。1992年に、政府の「教育の近代化ための国民協定」⁽¹⁷⁾ 分析のフォーラムが村で開かれた。それは、「協定」が謳う教育への市民、親、コミュニティなどの参加に沿ったものであった。翌年その成果として、「コミュニティ包括的教育」プログラム (Educación Integral Comunitaria Ayuujk: EDICOM) が作成さ

れる (Yinet[1998:10] ; Lassé[2001:7] ; Delgado Jiménez et al.[2001:97])。それは、村の開発中での彼らが目指す教育のあり方をより体系化したものであり、BICAP プロジェクトはその実質的な核であった。村は、村教育部 (Regiduría Municipal de Educación) を新設し、教育部門強化した (Yinet[1998:11])。

こうして、彼らはこれまでの経験を踏まえてより包括的で教育における自治性を明確にした構想を持つようになっていた。しかし、そうした構想と現実との乖離は広がっていた⁽¹⁸⁾。この地域でも新自由主義的な農業、土地政策と合わせて、政府の政策が示す限界や問題が明らかになり、それに対する不満は強くなっていた (Nahmad Sittón [2003] ; Servicio del Pueblo Mixe[n.d.])。

5 アユックコミュニティ総合高校 BICAPの創立

1994年のサパティスタの蜂起によって、先住民にとっての政治的な情勢は、大きく変わった。さらにこの年、前に村への農牧技術高校の設置を支持した元先住民庁長官のリモンが教育省大臣となり、元技術教育局長のラセは、その顧問となっていた。この機を村の指導者達が見逃すことはなかった。1995年、リモンに、BICAPの創設を請願する。リモンは、ラセに対し、「村の要求と決定を尊重することに特に留意しながら、この教育提案実施の責任者となる」よう要請し、プロジェクトが実現に向けて始動する (Yinet[1998:11] ; Lassé[2001:7])。1996年7月、他州の先進例の見学やコンサルト団体の指導を受けるなど、村のメンバーによるプロジェクト実施のための研究が進められ、8月、BICAPが40人の新入生を擁して始まる (プロジェクトを計画、準備してきた学

際的チーム (Equipo Interdisciplinario) のメンバーは、学校のコーディネーターとなった)。しかし、開校時には農牧技術教育局 (Dirección General de Educación Tecnológica Agropecuaria: DGETA) を通じて認可を得ようとするが、それが得られないまま、出発している (BICAP[n.d.])。12月に入って、高校教育局 (Dirección General de Bachilleratos: DGB) によって、そのパイロット・プロジェクトとして認可を得る (Delgado Jiménez et al[2001: 101])。新しい教育内容や教育方法、村の教育への関与を認めようとする大臣の意向は、DGETA では受け入れがたかったのであろう。1977年に、従来の農牧技術高校の校舎の一部が BICAP として用いられ始め、前者は入学者を持たずに2年後に廃止することとなった (BICAP[n.d.])¹⁹⁾。1999年には、DGBによって BICAP のプログラム (módulo) が認可をされ、正式な学校として認められることとなった。

しかし2000年に、70年余に及ぶ制度的革命党 PRI の支配に終止符が打たれ、国民行動党 PAN の新大統領の就任とともに教育省の大臣も代わり、BICAP は同年 DGETA の管轄下に置かれ、さらに2001年には行政的には農牧技術高校にもどる。

こうした状況は、新政権によるサパティスタの要求に対する否定的態度が明らかになってくる政治状況と密接に関わるものであろう。2000年には、村が EDICOM プロジェクトの一部として構想していた先住民大学の設置に替わり、通常教育システムとしてのテクノロジー・インスティテュート (インターネットを用いたサイバー大学) が設置される。教育機会は拡充していくが、そのコントロールは認めないという政策が繰り返されているようにみえる。

しかし、このような揺り返しがあるとはいえ、

サパティスタの闘争とその成果は、先住民の運動と政府の間のせめぎ合いを巡る座標軸を大きく変えたことは間違いない。BICAP の教育方法、内容は、農牧技術高校の枠内での一つのコースとして認められ、村 (運動) によるコントロールの権限は弱まるが、教育実践のレベルでの試みは続けられている。学校の教職員人事の大半はそのままにとどまっており、むしろ村出身の若い大学卒業者が教員として戻ってくることによって、「村の学校」としての色彩が強まっている面もある。BICAP のサイトでは、以後は「BICAP は、特別な支援や一定の教育サブシステムの規則に直接はしばられないという柔軟性を失った。…BICAP をこの国唯一のものとしている、独自のモデルの本質を失うことがないようにしながら、DGETA の規則に適応しなければならなくなった」と述べられている (BICAP[n.d.])。教育行政と村との妥協が成立したということができよう。

オアハカ州では2002年末現在で12の BICAP と同種の高校が設置されつつあり、また、1999年にはオアハカ市内に、先住民師範大学が創設された (Instituto Estatal de Educación Pública de Oaxaca[2003])。先住民主義的な色彩を持った後期中等教育、高等教育機関の設置を州や連邦の政府自身が進めることを余儀なくされているのである。

6 トラウイトルテペック村における中心集落のリーダーシップの危機

最後にこの項で、ここまで述べてきた村の教育運動の危機につながる中心集落のリーダーシップの危機について記しておきたい。今日オアハカ州の村 (municipio) では、その中心集落 (cabecera municipal) のリーダーシップ—役職者達

(autoridades)あるいはその集まり (ayuntamiento) 一に対しその他の集落 (アヘンシアやランチェリアなど) が反旗を翻すという事態が多々生じている。これは、政府が分権化政策によって、多額の予算を村に分配するようになってきたことに起因するとされている (Hernández-Díaz; Juan Martínez [2007: capítulo 5])。すなわちその結果、第1に、中心集落のリーダーが政府から受け取った多額の予算分配を行なう権限を持つようになり、それまでも目立っていた村内の中心集落とそれ以外の社会経済的格差が、こうした権限の中心集落に有利な方向への行使の結果として問題にされるようになってきたのである。第2に、特に先住民地域では、従来村の役職につくことは、名誉であり村への奉仕であって、経済的には報酬もない大きな負担であった。村の予算の拡大は役職者への報酬をわずかでもなんらかの形で可能とし、特に汚職による役職者個人の経済的利得機会をももたらすこととなった。汚職やその疑惑は、周辺集落による中心集落のリーダーシップに対する拒否の重要な動機となった。

そして、このような第1と第2の要素が混じり合った村内の対立・不信を、外部の政党勢力 (主に制度的革命党) が掻き立て、利用するようになった。すなわち、制度的革命党などは、周辺集落にある不満を基礎に、従来のリーダーシップ体制とは別の、村の中の野心のある者を自勢力に惹きつけて、彼らが新たなリーダーシップをとることを助けることを通じて、これまで困難であった先住民の村への勢力浸透を図ろうとしているのである。

同じくミヘ民族のアユートラ村では、すでに1998年にこうした周辺集落による「反乱」が生じていたが (米村[2007])、2009年トラウイ村においてもやはりドラスティックな形で「反乱」が

起きることとなった。筆者は同年12月に、村の教育運動に関わる歴史的な資料を得るため現地調査に訪れて、この事態の発生を知った。その詳細を追うための時間と用意はなかったが、村の会計役 (tesorero) という当事者とインタビューする機会があった⁽²⁰⁾。ここでは、その中から知り得た恐らく真実と大きくは異ならないと考えられる基本的事実のみを記すに止めるものとする。

2009年8月、トラウイ村は、慣例通り2010年度 (1月から開始) の役職者を選ぶ村民総会を開催し、トラウイトルテベック中心集落と10を数えるすべての周辺集落の人々が集まった。問題なく議事は進行し、2010年度役職者は決定された。ただし、一つの集落の人々がその前に退席するということがあった。周辺集落はランチェリアという行政カテゴリーにあり、これまで集落としては学校委員会という組織しか持っていなかったが、集落の最高機関としてのコミュニティ開発委員会の組織化が始まった。8月の総会の後、周辺集落の人々は周辺集落の一つに集合し、自ら (「反乱派」) のリーダーシップに基づく村民総会を開催し、次に異なる周辺集落へと移動しながらまた同様の村民総会を開催するということを繰り返していった。そして11月15日には、ついに、トラウイ村の中心地、すなわち現役職者達のいるトラウイ中心集落において、村民総会を開くに至った。この総会を巡って、その正統性を認めない現役職派の人々と「反乱」派を支持する人々との暴力的対立が生じた。そうした中で実力的に開催された村民総会では、汚職に関わったとして現役職者達の罷免、2010年役職予定者決定の否認が決議され、現役職者達は数日収監された。その後暴力的事態、混乱を避けるため、現役職者達は周辺集落による新しい権力を受け入れ、2010年役職予定者決定も無効とされた。新しい権力は行政的な中心集落

の役割を果たす場所を、これまでのトラウイ集落から別の集落へ移動させる予定である。

おわりに

メキシコ革命がもたらした先住民的なものの尊重、価値視とともに、コーポラティズム体制形成過程の中に残されていた先住民共同体地域の自律性は、トラウイ村の教育運動の発展にとって、重要な基礎となった。また、同村の運動は、運動の側がプロジェクト作成・実施において半ば行政的な役割を果たしたり、あるいは、公教育省の高い権限を持つ人物とのコネクションを有効的に利用したりするなど、コーポラティズム、パターナリズム、パーソナリズムにおいて特徴的な現象を示すものでもあった。

このような村の運動は、実際には先住民主義的傾向の教員や大学卒業生などの知識、行政的能力を有する者が大きな役割を果たしていた。彼らのかなりが村の役職者を勤めたり、あるいは教育、文化に関する村組織（社会文化委員会や村教育部など）を設置したりすることを通じて、村と先住民主義的リーダーシップが結びつけられ、運動は、それによって正統性と強さを得ることが可能であった。役職システムにおいては、その階梯を上って最後は村長、村長後見役などへと辿り着くことは、長年の村への奉仕の結果と観念されていたのである。

村の役職システムは、事実上中心集落を中心とした組織であったが、中心集落と周辺集落の利害の矛盾は、役職システムの奉仕的な性格によってみえないものとなっていた。しかし、政府の地方分権化政策による村への多額の予算の流入は、こうした中心集落を中心とした役職システムの正統性、それに基づくリーダーシップの正統性の基礎

を破壊し、自律性を担保していた役職システムそのものを破壊しつつある⁽²¹⁾。

幸か不幸か BICAP は通常の教育システムの中に戻ることになったため、その存続自体は、村のリーダーシップのあり方と関わりなく保証されているといえる。しかし、これまで村組織、役職システムとの結びつきを通じて発展してきた村の教育運動ととも、トラウイ村の今日の事態が、深刻な危機を意味することは否定できないように思われる。

注

- (1) こうした歴史的視点からの全国的な先住民運動の記述については、Yonemura[2009]参照。
- (2) ムニシピオ (municipio) は憲法に記されている自治体の基本単位であるが、オアハカ州農村地域では、村と訳すことが適当であろう。
- (3) ミッヘ民族についての基本的な理解は、黒田[1996], Kuroda[1984], Maldonado y Cortés[1999], Nahmad ed.[1994], Reyes[1995], などがある。また、バイリンガル教育の比較的初期については、米村[1993a], 米村[1993b]が扱っている。
- (4) 村人の名前は、ファーストネームで呼ぶこととする。
- (5) ミヘ民族に関する文化人類学的な研究を続けてきたナーマー (Salmón Nahmad Sittón) によれば、ミヘにおけるサレジオ教会は解放の神学派である (2009年12月16日インタビュー)。ただし、同じく奨学生としてプエブラにある教会の師範学校に送られたミヘのアユートラ村のフェデリコ (Federico Villanueva Damián) によると、学校でのカリキュラム、生活体験は特に、政治的、社会的関心を覚ますようなものではなく、普通に外部のニュースに接する機会があった程度とのものであった (2009年12月5日インタビュー)。
- (6) マウロも昔を懐かしむ口調で、「当時は電気、水道、開発はなんでもいいものと思っていた」と回想している (2003年12月16日インタビュー)。
- (7) 村の会計役 (tesorero) のマリーノ (Marino López Vásquez) が当時の村長に尋ねたことによると、隣

村のタマスラバンは、トラウイトルテベック村にバス道が通るようになることに強く反対し圧力をかけてきて、それがこの決定の原因となったと答えたという（2009年12月9日マリーノへのインタビュー）。

- (8) 農村地域にも急速に初等教育普及を進める上で必要であったBICAP[2001:77]。
- (9) 2003年12月14日インタビュー。
- (10) 先に述べた第1回先住民全国大会に、村の代表はその楽隊とともに参加した。
- (11) Instituto Nacional Indigenista, Centro Coordinador Indigenista, Ayutla, Oax.[1982]の anexos の1977年11月16日付けの議事録。
- (12) 彼らの文書に、PRIやその傘下のCNCといった政府との関係を媒介する政治組織に依存せずに、直接政府との関係を持って、要求実現に成功していったことが、こうした既存勢力の巻き返しを呼んだ旨の記述がある（この成功がどの経験を指しているか—そこに師範学校や音楽訓練センター獲得が含まれているかどうか—明らかではない）(Nahmad Sittón[2003:577])。
- (13) SERができる前の母体となった「ミヘ役職者総会 (La Asamblea de Autoridades Mixes, ASAM)」に関する文書の中で、PRIやCNCなどの仲介者を避け、州政府などとの直接交渉を促進するためASAMの総会をオアハカ市で行なうという記述がある (Nahmad Sittón[2003:576])。このような意味において、SERの立地は便利であったろう。
- (14) 教育における自治を基調とする「結論」部分をナマードが紹介している (Nahmad Sittón[2003:396-397])。
- (15) BICAP[2001]に「ミッヘ民族の包括的教育のためのアイデア」が掲載されている（それはNahmad Sittón[2003:396]の引用部分と一致している）が、編集されており、一部は明らかにオリジナルと異なる。本稿は、このBICAP掲載文に基づいている。
- (16) プロジェクト文書の内容やそれが1986年の農牧技術高校設置の請願に用いられたことからみても、それが、師範学校に代えた、彼らの目指す後期中等教育機関創設の要求を準備するためのものであったことは間違いないであろう。
- (17) これは、政府、州、教員組合の間の協定で、具体

的な改革としては基礎教育行政の州への移管が重要であるが、コミュニティによる教育への参加なども謳っている。

- (18) ミヘの別の村での同様のプロジェクトに対して、政府は通常の高校の設置しか認めなかった。
- (19) Yinet[1998:11]では、1996年の9月からCBTAの施設が使われていたとなっている。
- (20) 2009年12月8日マリーノとのインタビュー。
- (21) こうした中で、先住民地域の自律性が改めて周辺集落（あるいはその連合）の自律性という形で現れているということができるかもしれない。しかし、そこには制度的革命党という外部勢力の影が明らかであり、その自律性は疑問視されなければならない。

参考文献

〈日本語文献〉

- 黒田悦子[2002]「先住民運動に参加するまでの遠い道のり：メキシコ、オアハカ州のミヘの人々と指導者たち」(黒田悦子編『民族運動の指導者たち：歴史の中の人びと』山川出版社 231-249ページ)。
- 米村明夫[1993a]「メキシコのバイリンガル教育—1981年オアハカ州ミッヘ民族地区調査結果の分析—(I)」(『アジア経済』第34巻第4号 April 2-18ページ)。
- [1993b]「メキシコのバイリンガル教育—1981年オアハカ州ミッヘ民族地区調査結果の分析—(II)」(『アジア経済』第34巻第5号 May 21-36ページ)。
- [2003]「アユック・コミュニティ高校BICAP—メキシコ先住民コミュニティの教育プロジェクト」(『ラテンアメリカ・レポート』第20巻第2号 42-51ページ)。
- [2007]「メキシコ先住民地域における競争的な教育発展：オアハカ州ミッヘ民族の3つの村の事例」(米村明夫編『貧困克服と教育発展：メキシコとブラジルの事例研究』明石書店 83-124ページ)。

〈外国語文献〉

- BICAP[n.d.] “Proceso Histórico” (<http://www.bicap.edu.mx/bicap/historia.htm> 2008年1月18日 閲

- 覽).
- Delgado Jiménez, Mauro; Palemón Vargas Hernández; Benito Martínez Díaz; Wilfrido Gallardo Torres; Rubén Martínez Pérez[2001] “Bases filosóficas del proyecto educativo ayuujk y el proyecto pedagógico del Bachillerato Integral Comunitario Ayuujk Polivalente BICAP”, BICAP ed., *La voz y la palabra del pueblo ayuujk*, México. D.F.: Universidad Pedagógica Nacional, pp.63-112.
- Instituto Estatal de Educación Pública de Oaxaca (IEEPO)[2003] *Escuela Normal Bilingüe e Intercultural de Oaxaca: guía académica 2002-2003*, Oaxaca: Instituto Estatal de Educación Pública de Oaxaca (IEEPO).
- Instituto Nacional Indigenista, Centro Coordinador Indigenista, Ayutla, Oax.[1982] “Reunión general regional de la escuela de música de la región Mixe”, (unpublished document).
- Kuroda, Etsuko[1993] *Bajo el Zempoaltepetl: la sociedad mixe de las tierras altas y sus rituales*, Oaxaca: Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social; Oaxaca: Instituto Oaxaqueño de las Culturas.
- Lassé, Rolando de[2001] “Presentación” en BICAP ed., *La voz y la palabra del pueblo ayuujk*, México, D.F.: Universidad Pedagógica Nacional, pp.7-22.
- Leyva Solano, Xochitl[2005], “Indigenismo, indianismo and ‘ethnic citizenship’ in Chiapas”, *Journal of Peasant Studies*, Vol.32, No.3 & 4, July, pp.555-583.
- Maldonado Alvarado, Benjamín; Margarita M. Cortés Márquez[1999] “La gente de la palabra sagrada. El grupo etnolingüístico Ayuuk ja’ay (mixe)” en Alicia M. Barabas y Miguel A. Bartolomé eds., *Configuraciones étnicas en Oaxaca: perspectivas etnográficas para las autonomías*. Vol.II., México, D.F.: Instituto Nacional de Antropología e Historia and Instituto Nacional Indigenista, pp.95-144.
- Nahmad Sittón, Salmón[2003] *Fronteras étnicas análisis y diagnóstico de los sistemas de desarrollo: proyecto nacional vs. proyecto étnico. el caso de los ayuuk (mixes) de Oaxaca*, Oaxaca: Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social (CIESAS).
- ed.[1994] *Fuentes etnológicas para el estudio de los pueblos ayuuk (mixes) del estado de Oaxaca*, Oaxaca: Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología; Social Oaxaca: Instituto Oaxaqueño de las Culturas.
- Reyes Gómez, Laureano[1995] “Mixes” en Marco Antonio Vásquez Dávila y otros ed., *Etnografía contemporánea de los pueblos indígenas de México: región Transistmica*, México, D.F.: Instituto Nacional Indigenista, pp.169-205.
- Sevicio del Pueblo Mixe (SER)[n.d.] “Memoria histórica” (<http://www.redindigena.net/ser/frameset.html> 2008年2月16日閲覧).
- Yinet[1998] Órgano informativo del Bachillerato Integral Comunitario Ayuujk Polivalente.
- Yonemura, Akio[2009], “Dynamics of Ideal Values and Social Movement in a Corporatist State: Mexican Indigenous Peoples’ Movements and a Village’s Challenge”, Sinnichi Shigetomi and Kumiko Makino eds. *Protest and Social Movements in the Developing World*, Cheltenham, UK: Edward Elgar Publishing Inc.; Northampton, MA, USA: Edward Elgar Publishing Inc., pp.159-182.

(よねむら・あきお／地域研究センター・主任研究員)